季節を詠む、時流を詠む 四季の歌

美野里短歌クラブ

嫁の手がいきいき動きできあがる孫のキャラ弁驚きて見る　菱沼清子
暑くなりタンスをあけていそいそと半袖着ればこころも軽し　菱沼友江
ベトナムの研修生が働いてみごとに出来るソーラー発電　山口和代
餌を食べ水を飲み終え毛づくろい今日も老い猫まだまだ元気　宇都宮和子
咲き揃う庭のさつきに朝からの雨が無情に降りそそぐかな　碇谷きえ

小川短歌会

ささ竹にゆれる短冊みて浮かぶ六十年経しきょう父の命日　石田はる江
図書館の帰りと友は一人居のわが家に寄りて満面の笑み　根本智恵子
セルフレジすんなり済ませ長き列をしり目に八十才まんざらでなく　幡谷啓子
わくら葉をふみて掘底道を行く左右の土塁は十メートル越ゆ　中根良子

玉里短歌会

蜜を吸う蜂のかたわら顔寄せて香り楽しむ我がラベンダー　松田通喜
百余段の石段掃かれ万緑の火伏の社に幟はためく　野口初江
姉二人月夜に踊る庭さきに野崎参りの唄が聞こえき　石橋吉生
育ちたる子つばめ三羽巣を出でて親と一緒に飛び廻りをり　鶴町文男
ポシェットがトレードマークのご夫妻に今日はいつもの犬が見えない　齋藤かつみ

みづうみ俳句会

毎日の暑さをいやす蝉しぐれ　長島昭
山ゆりのかすかにゆれる山の奥　長島さかえ
愛らしさ眺めてあきぬさくらんぼ　三村れい子
耳疎き二人の会話今朝の秋　長島久美子
油照頁をめくる音一つ　長島美奈子

みのり俳句会

届きたる新茶を友と汲む至福　立原千代
結界の狭間に香る白き百合　塚田文江
村二つつなぎて広き青田かな　友水清
野放図に大木揺らぐ空は夏　佐藤清子
咲く花を教えてくれし夏の蝶　島田草心

欅の会

立秋や生成りのシャツのたたみ皺　岡島禮子
合歓の花話し相手の超スロー　村田妙子
西瓜冷え丸い緑の夢を呼ぶ　岡島進
余命なお神の掌の中蝉しぐれ　井坂あさ
百日紅なんにもしたくない窓辺　木村小夜子

くるみ俳句会

吹き上る風の涼しさ野草揺れ　信田菊女
煩悩の心洗える蓮の花　島田篁村
塩蜻蛉ちょんと水輪を作りけり　城垣内睦子
日盛りを歩るき来たらし子の無口　福島邦誉
二、三枚千切りて鉢の紫蘇香る　堀内いづみ

たまり俳句会

積乱雲散歩切り上げ戻りたり　長谷川光男
山峡に轟く滝や雲を生し　松田通喜
南部風鈴夫と選びし陸奥の旅　矢口友子
夏雲や潮騒ひびくカフェテラス　大石康子
団十郎という牽牛花見得を切り　小玉知子

小美玉川柳会

ヒグラシは哲学者かなカナ？カナ？と　江戸忠男
西瓜冷やし丸い緑が夢を呼ぶ　岡島進
キュッキュッと靴が鳴って孫が来た　石井昭夫
憂い無い世を望んでも高望み　橋本昇丘
墓なぎにルーツ感じる出会いの場　小林岳悠